

学科 管理栄養学科	氏名 田中優成																																											
<p>家政学部の教育目標は、本学の教育目標と教育方針の下、「真心・努力・奉仕・感謝」の四大精神の実践を通して社会的に自立して生きていく上で必要な①スキル・リテラシー・教養等に関する一般的知識・技能と②家政に関する専門的知識・技能と③建学の精神・社会人基礎力・pisa型学力を統合的に身に付け、社会に出てからは、これらの知識・技能をベースに生涯学習社会の中で自己の潜在能力をさらに開発しながら、職場と地域の課題解決に貢献できる人材を育成することである。</p>																																												
<p>イ ライフスタイル学科の教育目標は、家政学部の教育目標の下、これからの社会の新しいライフスタイルのデザインを提案することによって、人々の日常生活を衣・食・住の面から支援することのできる人材を育成することである。</p>																																												
<p>ロ 管理栄養学科の教育目標は、家政学部の教育目標の下、管理栄養士の資格を生かして、チーム医療、健康増進・疾病予防、食育・栄養指導又は健康をテーマにした食品の研究・開発等で活躍することによって、人々の日常生活を健康の面から支援することのできる人材を育成することである。</p>																																												
<p>ハ こどもの生活学科の教育目標は、家政学部の教育目標の下、保育士・幼稚園教諭・小学校教諭の資格を生かして、子どもたちの学力および社会性・社会力の基礎・基本を育てることによって、人々の日常生活を子育ての面から支援することができる人材を育成することである。</p>																																												
<p>1 教育の責任</p>																																												
<p>私は主に栄養教育論分野を担当しており、家政学部管理栄養学科の教員としては2026年3月の時点で3年が経過した。</p>	<table border="1"> <thead> <tr> <th>科目名</th> <th>開講時期</th> <th>受講者数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>栄養教育論Ⅰ</td> <td>2年後期</td> <td>61名</td> </tr> <tr> <td>栄養教育論Ⅱ</td> <td>3年前期</td> <td>68名</td> </tr> <tr> <td>栄養教育論実習Ⅰ</td> <td>3年前期</td> <td>70名</td> </tr> <tr> <td>栄養教育論実習Ⅱ</td> <td>3年後期</td> <td>61名</td> </tr> <tr> <td>基礎キャリア教育</td> <td>2年後期</td> <td>57名</td> </tr> <tr> <td>専門実践実習</td> <td>3年通年</td> <td>23名</td> </tr> <tr> <td>栄養実習事前・事後演習</td> <td>3年通年</td> <td>71名</td> </tr> <tr> <td>臨地実習C(臨床)</td> <td>3年通年</td> <td>61名</td> </tr> <tr> <td>管理栄養士特論A</td> <td>3年後期</td> <td>74名</td> </tr> <tr> <td>臨床総合演習</td> <td>4年前期</td> <td>62名</td> </tr> <tr> <td>管理栄養士特論B・C</td> <td>4年前期・後期</td> <td>60名</td> </tr> <tr> <td>卒業研究</td> <td>3年/4年</td> <td>4名</td> </tr> <tr> <td>城西高校講座</td> <td>高校3年前期</td> <td>46名</td> </tr> </tbody> </table>		科目名	開講時期	受講者数	栄養教育論Ⅰ	2年後期	61名	栄養教育論Ⅱ	3年前期	68名	栄養教育論実習Ⅰ	3年前期	70名	栄養教育論実習Ⅱ	3年後期	61名	基礎キャリア教育	2年後期	57名	専門実践実習	3年通年	23名	栄養実習事前・事後演習	3年通年	71名	臨地実習C(臨床)	3年通年	61名	管理栄養士特論A	3年後期	74名	臨床総合演習	4年前期	62名	管理栄養士特論B・C	4年前期・後期	60名	卒業研究	3年/4年	4名	城西高校講座	高校3年前期	46名
科目名	開講時期	受講者数																																										
栄養教育論Ⅰ	2年後期	61名																																										
栄養教育論Ⅱ	3年前期	68名																																										
栄養教育論実習Ⅰ	3年前期	70名																																										
栄養教育論実習Ⅱ	3年後期	61名																																										
基礎キャリア教育	2年後期	57名																																										
専門実践実習	3年通年	23名																																										
栄養実習事前・事後演習	3年通年	71名																																										
臨地実習C(臨床)	3年通年	61名																																										
管理栄養士特論A	3年後期	74名																																										
臨床総合演習	4年前期	62名																																										
管理栄養士特論B・C	4年前期・後期	60名																																										
卒業研究	3年/4年	4名																																										
城西高校講座	高校3年前期	46名																																										
<p>右表はオムニバスで実施した科目も含め2025年度に担当した科目である。授業以外にはNRサプリメントアドバイザー資格試験の対策講座、情報教育委員、3年生の指導教員、臨地実習委員、国家試験対策委員、オープンキャンパスの模擬授業、高校生に対する「なるには講座」を担い、「AGENTS」のスポーツ栄養サポートチームを立ち上げ、系列校の高校硬式野球部の栄養サポートなどを行った。卒業研究では、スポーツ栄養、サプリメント、地域高齢者、運動中の飲水に関する研究を行い、ゼミ生全員が学会発表を行った。 (資料1) (資料2) (資料3) (資料4)</p>																																												
<p>2 教育の理念と目的</p>																																												
<p>「食」や「健康」はすべての人が経験し、そして興味・関心をもちやすい分野である。インターネットやSNSが人々の生活と密着した今日では、その多種多様な情報の真意を一人ひとりがそれぞれに吟味しながら生活している。このような社会情勢において、管理栄養士には食や健康の専門家として人々の食行動を科学的に捉え、適切に栄養教育を行っていくことが求められる。</p> <p>これらのことを踏まえ、私の教育の理念と目的は「多種多様な情報を自ら正しく選択し、人々を望ましい食生活へと導くことができる管理栄養士を育成すること」である。栄養教育の実践の場は、学校や病院以外にも地方自治体や地域ボランティアなど無数に想定される。どのような現場、状況であっても専門家としての見解を分かりやすく伝えられる人材へと自ら成長してもらうため、学びの環境づくりに努めている。</p>																																												

### 3 教育方法

主に 2, 3 年次で開講されている科目を担当していることもあり、上記理念の下、管理栄養士として必要な専門的知識を修得させることを目指している。特に栄養教育分野では、授業で学修する内容を単に暗記するのではなく、それらを活用し、そして対象者の課題を解決に導いていく能力が問われる。そこで、栄養教育論 I の予習では Google forms (資料 5) を活用して、事前に新出単語の意味を理解してから授業に臨むように設計している。そして本時では、どのようにそれらの理論や技法を活用していくのかを実際の栄養場面を想定した活用方法を自ら考えさせることを中心に授業を展開している。また、NotebookLM を活用して学生に自己学修を促すことで、すぐに疑問を解決できる仕組みづくりを確立した。

### 4 授業改善の活動

全学共通で行われている大学授業評価アンケート (資料 6) に加え、授業中に出てきた疑問や理解できなかったことは PCR シート (資料 7) に書き込んでもらう形式としている。PCR シートは前回内容のものを授業開始時に回収しているため、学生が栄養教育の内容を考えている時間を活用して全ての PCR シートに目を通し、疑問に対して回答するようにしている。また、そこに書かれていた内容を書き出しておき、次年度以降に授業で説明する際の参考とすることで授業内容の改善を行っている。以前はすべての疑問に授業の前半部分を使って回答していたものの、NotebookLM である程度の疑問を学生自身が解決できる仕組みづくりを行ったことで、しっかりと考えるための授業時間を確保できるようになった。

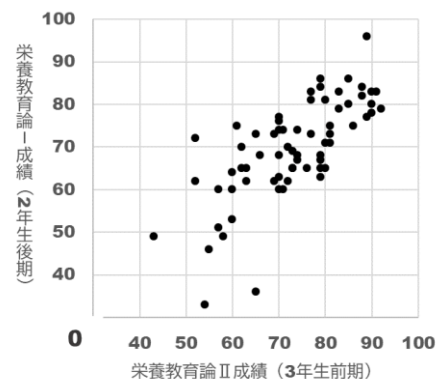
### 5 学生の授業評価

各授業に対して大学授業評価アンケート (資料 6) を行い、3 年生開講科目の座学である栄養教育論 II、実習である栄養教育論実習 II の一部を抜粋したものを右表に示す。全体的に栄養教育論 II と比較して栄養教育論実習 II の平均点 (Mean) が低く、標準偏差 (SD) も高い値を示した。この差は、実習科目の性質上、自身で取り組むことの多い栄養教育論実習 II では、教員の説明が少なくなり、教員の熱意や話し方の工夫などが感じられにくかったことに依存している可能性がある。成長を実感することができたという項目ではいずれの科目も同程度に実感できているため、次年度は問題意識や教員の熱意や意欲がより伝わるような授業内容に改善していきたい。

評価項目 (5点満点評価)	栄養教育論 II (n=64)		栄養教育論実習 II (n=58)	
	Mean	SD	Mean	SD
この授業は、シラバスに一致して実施していた。	4.66 ±	0.62	4.52 ±	0.73
学生が積極的に取り組めるような工夫をしていた。	4.63 ±	0.60	4.48 ±	0.75
教員の話し方は聞き取りやすかった。	4.59 ±	0.61	4.45 ±	0.75
教員は学生の理解度を確認しながら進めていた。	4.59 ±	0.64	4.50 ±	0.71
教員は熱意や意欲をもって授業に取り組んでくれた。	4.61 ±	0.63	4.50 ±	0.73
シラバスやカリキュラムツリーを参考にこの授業の到達目標や学習目標を理解したうえで受講した。	4.45 ±	0.69	4.38 ±	0.72
この授業に意欲的・積極的に取り組むことができた。	4.52 ±	0.67	4.48 ±	0.71
学修への興味や意欲を膨らませることができた。	4.48 ±	0.64	4.45 ±	0.75
この授業を通じて、あなたは知識や技能を身につける等、成長を実感することができた	4.45 ±	0.73	4.48 ±	0.73
この授業について、全体として満足しましたか。	4.48 ±	0.67	4.47 ±	0.73

### 6 学生の学修成果

右図は、成績の関係を散布図として示したものである。縦軸は栄養教育論 I の成績、横軸は栄養教育論 II の成績を表している。両科目の成績には有意な正の相関が認められ ( $r=0.724$ ,  $p<0.05$ )、栄養教育論 I における学修到達度が、次学期の栄養教育論 II における到達度にも一定程度反映されていることが示された。一方で、散布図の多くのプロットは  $y=x$  の直線より右側に分布しており、栄養教育論 I と比較して栄養教育論 II において成績が向上している学生が多数を占めていることが確認できる。特に、栄養教育論 I の成績が相対的に低かった学生の中にも、栄養教育論 II で成績を伸ばしている例が認められ、初期段階の到達度にかかわらず学修の成長が生じていることが示唆される。以上より、栄養教育論 I から II へと段階的に学修内容を構成したことにより、学生が基礎的理解を踏まえながら知識の統合や応用力を高め、学修成果を向上させている様子が示された。本科目群は、継続的な学修を通じて学生の成長を促す教育効果を有していると評価できる。



## 7 授業科目に関連した教材開発

栄養教育においては、わかりやすく伝わりやすい教材作成も学修内容の一部として含まれる。そのため、授業で用いるスライドや配布資料では、学生が作成する際の見本となるような教材の作成を心掛けている（資料 8）。具体的には、基本事項については教科書に沿って説明するものの、教科書に書かれている内容を図式化、スライド化することでどのようなことを伝えたい時にどのような表現をすれば良いのかということを経験を通じて体感してもらっている。また、学生が教材を作成する実習では、どのようなことをすると見えづらく、伝わりにくくなってしまふのかということを実際にわかりにくい教材の例を作成することで伝えるようにしている（資料 9）。加えて実際の授業で用いる事例などは自身が執筆している参考書から抜粋しており、より実践を踏まえた内容になるように心がけている（資料 10）。

## 8 指導力向上のための取り組み

全学共通で FD 研修として行われている公開授業に参加することによって、様々な他教員の授業を見学し自身の授業に取り入れられることを学んでいる。また、先述のとおり栄養教育においては最先端の話を専門的視点から理解しておくことが重要で、常に新しい情報へと授業内容をアップデートしなければならない。そのため私は、日本栄養改善学会、日本食育学会、日本スポーツ栄養学会といった栄養に関する学会だけでなく、日本老年医学会や日本咀嚼学会、日本摂食嚥下リハビリテーション学会など様々な学会に所属し、最先端の情報を仕入れるとともに様々な学術雑誌へ論文投稿するとともに様々な学会で学会発表をすることによって自身の見解を拡げている（資料 11）（資料 12）。

また、今年度は新たな取り組みとして、アサーティブな学生活動を支援するためのスポーツ栄養サポートチーム（AGENTS）を立ち上げた。今年度の活動としては、サッカースポーツ少年団への夏バテ予防教室や硬式野球部の食事トレーニングのための食事提供などを中心に活動した。

## 9 今後の目標

自身の教育理念に基づき、まずは学生たち自身が多種多様な情報を自ら正しく選択できる能力を身につけるために、上記の改善点を踏まえて日々の授業で主体的な学びを実践していくことを短期目標とし、そして本学を卒業していく学生が人々を望ましい食生活へと導けるような管理栄養士に成長すること、それらを支援していくことを長期的な目標として掲げる。

## 10 添付資料

（資料 1）アスリート向け食事バランスガイドの試作－活用可能性と課題－，第 72 回日本栄養改善学会学術総会，2025.

（資料 2）飲水種類の違いが水分摂取量と主観的評価に及ぼす影響，第 72 回日本栄養改善学会学術総会，2025.

（資料 3）オーラルフレイルの簡易自記式質問票と地域在住高齢者における栄養状態の関連，第 72 回日本栄養改善学会学術総会，2025.

（資料 4）サプリメント市場の現状と管理栄養士養成学生における意識・知識調査，第 72 回日本栄養改善学会学術総会，2025.

（資料 5）栄養教育論 I Google forms 問題抜粋

（資料 6）大学授業評価アンケート

（資料 7）栄養教育論 I PCR シート

（資料 8）栄養教育論実習 I 授業スライド

（資料 9）栄養教育論実習 II 授業スライド

（資料 10）栄養教育・栄養指導論・演習・実習 [第 3 版]，株式会社みらい

（資料 11）日本人若年アスリートにおけるスポーツ栄養知識質問票の因子構造検討. 日本スポーツ栄養学会第 11 回大会 2025.

（資料 12）老人クラブ会員に対する情報提供が口腔機能や食事摂取状況にもたらす効果，日本老年医学会誌，62(2):220-232.